

ドM巨根男対 ドS婦警さん！

冤罪を被って

金責め尋問を受けに来た男を
予想を超える過酷な玉責めが襲う！

心が折れて

自白しても信じてもらえない！



玉子王子 著

1章 ドM男、キ〇タマ責めを受けるために婦警だけの警察署に身代わり出頭す

——一度でいいから、縮み上がりたいものだ……

江武田洋一は三十を少し超えている。

年齢もそうだが、男性器の長さもだった。

超巨根、などというレベルだろうか。

それが、鋼のようにそり立ってほとんど胸の前でビクンビクンと痙攣していた。

それを見ているのは、女。

どちらかといえば大人しめの印象を受ける女性。

しかし、キックボクシングをやっていて引き締まった体なのは、全裸なのでよく分かった。

うっすら筋肉の浮いた腹筋に、その上に押し掛かってくるかなり大きい乳房。

それを左右から押して圧縮するように両手を構えていた。

「それじゃ、いくよ？」

「女の蹴りなんか」

ビク、と江武田の巨柱が引きつる。

「効くわけないだろ」

「またそれ……」

「こういうこという男が、女の蹴りでやられるのがまたいいんだよ。さあ、早くやってくれ」

全裸の男女。

やることは一つで、実際それをしている。

男は、そのつもりだ。

二人、ベッドの横で立っている。

両足を思い切開き手は首の後ろに回している。

完全に無防備。

足の間で、これまた一物に劣らず巨大な睾丸が二個ゆったりと垂れ下がっている。

それを、蹴れというのだ。

最愛の恋人に。

眉を顰める巨乳キックボクサー。

——もう、マジで信じられない。いつもいつも……キ〇タマ蹴らせて。

恋人、鶴屋はごく普通の女性だった。

キックボクシングでそれなりの技術を持つが、今ひとつ根性がなくて試合に勝てない。

近々根性試しをしよう、とマネージャーをしてきている姉に言われている。

まあ、それはこの場では関係ない。

普通の女性にとって、最愛の恋人の睾丸を蹴るなど考えられない。

いや、特殊性癖があればむしろ蹴りたがるだろうが、鶴屋にはそういうのはなかった。

ドS女性がやたら多いといわれるこのうさぎ県であっても、そうでない女性の方が当然多いのだ。

とはいえ、ドS女性の数が異常に多いことも確か。

周りにそういう女性が複数いるので、鶴屋もこの「儀式」を我慢してきた。

だが、それも限界に来ていた。

「ねえ、洋一……この儀式やめない？」

「やめない」

「やめないなら、別れようか？」

「なんだって！？ キ○タマ蹴らないで付き合うか、別れるか、選べってのか？」

「そう」

あっさり「別れる」といわれるかもしれないと危惧していた鶴屋が少しほっとする。

「悩んでくれてうれしいわ」

「いや、驚いただけで別に悩まない。その条件ならもちろん別れるが……でも今日は最後なんだから蹴ってく…
…おぐあああああああああ！」

「この腐れキ○タマが！ キ○タマ潰れて死ね！」

「この腐れキ○タマが！ キ○タマ潰れて死ね！」

メキャ、と相当まずそうな音を立てて鶴屋の爪先が江武田の陰囊を跳ね上げ、中の肉玉を二つ押し潰す。キックボクシングの前へ押す前蹴りでない、辜丸を蹴り上げるための爪先を下から跳ね上げる蹴り。江武田にやらされ続け、完全に自分のものにしてきた。潰れても構わない、どうせナノマシンいりの薬で数秒で治るのだ。そう考えて、思い切り蹴り込んだ。



メキャ、と相当まずそうな音を立てて鶴屋の爪先が江武田の陰囊を跳ね上げ、中の肉玉を二つ押し潰す。

キックボクシングの前へ押す前蹴りでない、睾丸を蹴り上げるための爪先を下から跳ね上げる蹴り。

江武田にやらされ続け、完全に自分のものにしていく。

潰れても構わない、どうせナノマシンいりの薬で数秒で治るのだ。

そう考えて、思い切り蹴り込んだ。

「はぐあああああああああ」

股間を押さえ、転がる江武田。

その頭を踏みつけてから、服を着て出て行く鶴屋。

「あああああ、ちょ、ま……ふざけるなよ……」

粘つく汗を流しながら、床に涎を垂らして歯を食いしばる江武田。

さすが、思い切り蹴られるのは想定外だった。

……というようなことはまったくなかった。

「まだ片金も潰れてねえじゃねえか……ふざけんなよ……」

名前の通りのM男子だった。

巨大な肉玉は蹴り上げられて縮み上がっているが、江武田の望みはそういうことではなかった。

一度でいいから、これから始まる急所攻撃に怯えて、玉を縮み上がらせたいものだ、ということ。

巨大なビルの一室。

十人ほどのスーツの男が並んで立っている。

中に、江武田。

十人は、そろってボンクラばかり。

特に江武田は、「とりえは巨根だけ」と優しい人間には言ってもらえる。

普通の人間には「とりえなし」とみなされている。巨根など別にどうでもいいことなのだから、妥当な評価といえるだろう。

「皆も知っての通り、今警察が動いている」

最近世襲で社長になった、江武田たちと同年輩の男がレイプパーティーをやらかした。

社長がパクられたら終わりなので、ボンクラのお前ら誰か身代わりに出頭しろ。

というようなことを、多少は丸く伝える会社幹部。

青ざめる男たち。

「会社のために逮捕されるわけだから、出てくれば関連企業の重役のポストは約束される。裏で金もだす！ 一年二千万だ！ 懲役行って、男になれ！ あ、お前ら録音してないだろうな」

普通に考えれば美味しいような美味しくないような。

「ちなみに、うちの弁護士先生によれば、このぐらいの事件なら三年ぐらいたと。六千万掴んで、重役だ！ 我こそはと思うものは早い者勝ちだ、手を挙げろ」

正直、うだつの上からないボンクラ社員たちにとって人生をかえるチャンスという考え方もあるだろう。

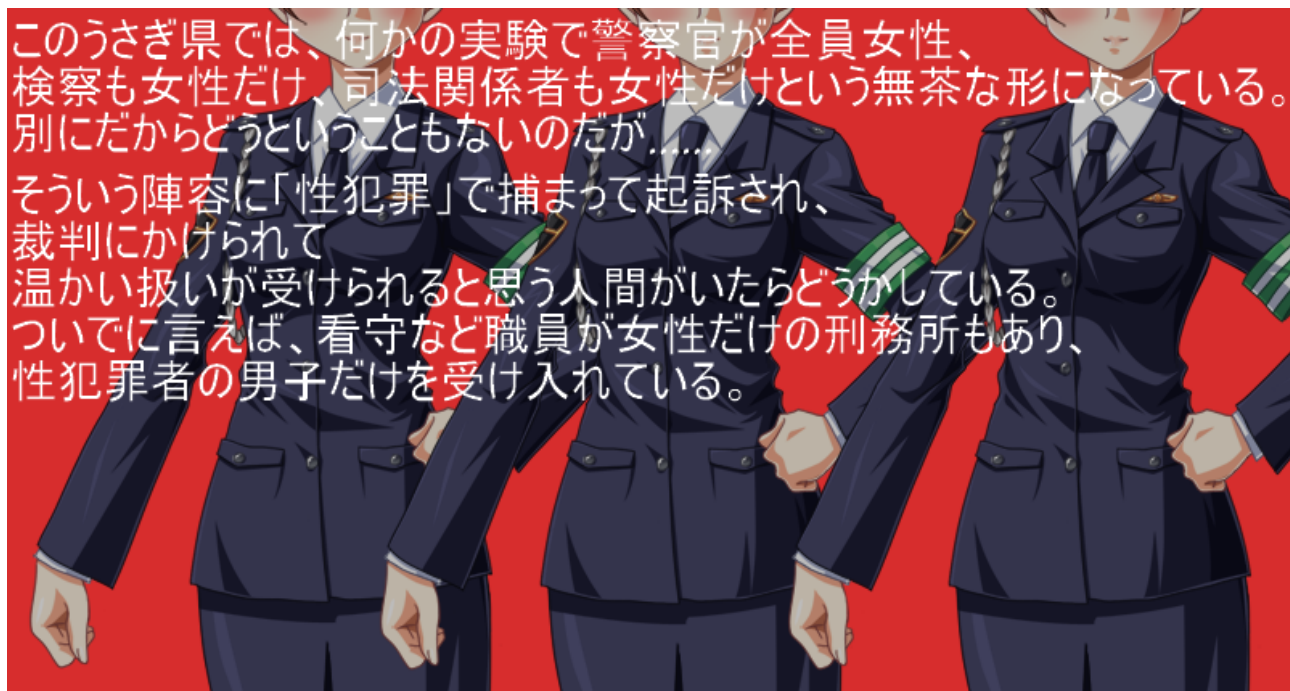
あるにはあるが、実際のところ難しい。

罪状が問題だった。

性犯罪だ。

それはまずいのだ。

このうさぎ県では、何かの実験で警察官が全員女性、検察も女性だけ、司法関係者も女性だけという無茶な形になっている。



「冗談じゃねえよなあ」

「そうそう。このうさぎ県で性犯罪で捕まるってことは、もうこれは

国家権力対キ○タマって構図

でしかないからな」

玉が潰れても治るのをいい事に、金責め尋問など当然のように行われているという噂だ。

別にだからどうということもないのだが……そういう陣容に「性犯罪」で捕まって起訴され、裁判にかけて温かい扱いが受けられると思う人間がいたらどうかしている。

ついでに言えば、看守など職員が女性だけの刑務所もあり、性犯罪者の男子だけを受け入れている。

「冗談じゃねえよなあ」

「そうそう。このうさぎ県で性犯罪で捕まるってことは、もうこれは**国家権力対キ○タマって構図**でしかないからな」

玉が潰れても治るのをいい事に、金責め尋問など当然のように行われているという噂だ。

警察が女だけだと、男の犯罪者に舐められないようにと強く出ざるを得ず、それは男女の力の差を埋めるために急所攻撃を多用するという形になりがちだ。

うさぎ県の犯罪者で、婦警に辜丸を蹴られていないものの方が珍しいといわれる理由だ。

そういう女たちの中に「性犯罪者」として飛び込みたいものなどいるわけがない。

「俺行きます！」

いるわけがない、ドM男江武田以外は。

「俺婦警さんにキ○タマ……じゃなくて、会社に命捧げてますから！」

「いってくれるか！ いや、始めて役に立ってくれるなあ……」

——婦警さんにキ○タマ蹴りまくってもらった上に金までもらえる。いい時代になったものだ。

考えただけでも、ズボンの中が大変な事にならない。

江武田の一物は巨大すぎて、パンツの中で立てるような状態で収納不可能なのだ。多少膨らむのが限度で、それ以上は痛くて動きようがない。

江武田はM男子とはいえ、痛みなら何でもいい訳ではない。

あくまでも睾丸への肉体的な責めを好むだけだ。

精神的な苦しみは、睾丸責めとの関連が好きだけで、寝取られなどが好きというようなことはまったくない。

特に理解しがたいのが、尻穴への責めだ。

——アレは意味不明だからな。

M男子の交流サイトで何度も論争した。

金責めマゾとケツ穴マゾは少なくとも江武田の知る範囲では対極に位置していた。

金責めマゾの彼としては当然ケツ穴派は理解不能なのだった。

——あんなもん自然の摂理に反してるんだ。だってケツの穴に入れて子供が出来るか？

睾丸を蹴られて子供が出来るのかという問いには関心がない江武田だった。

ともかく証拠を用意し、口裏を合わせて警察署に出頭する江武田。

自分も証拠を持っていくが、会社の人間にも提出させる。

むしろそちらがメインだ。

全証拠を「犯人」がまとめて持っていくなど胡散臭すぎるから当然といえる。

ともかく、江武田は出頭する。

「江武田洋一……レイプパーティー事件の主犯？」

「はい。会社がちゃんと調べて証拠を集めたんで……逃げられないと思って出頭しました。もう証拠も出てるんですよ？」

「皆、来て！」

受付の婦警が声を上げると、バツと周りから同じ制服の若い女たちが集まってくる。

皆機敏で、服の下はさぞ引き締まっているのだろうと思わせる。

「この前のレイプパーティー事件で、逃げ回ってた主犯だって」

現場に警察が踏み込んできたが、何とか社長だけ逃げ出した。

仮面をつけ、仲間たちには素性を知らせていなかったのも何とか掴まっていなかったが、外堀から調べていけばいずれ掴まったはずだ。

が、「犯人」がこうして証拠つきで出頭したなら、逃げ切れる。というか、捜査は終わるだろう。

「会社が出してきた証拠は、確かに江武田が犯人と示してたわね。それに加えて、本人の出頭と……これは決まりですね」

「そう。それじゃ、逮捕するわ。いいわね江武田？」

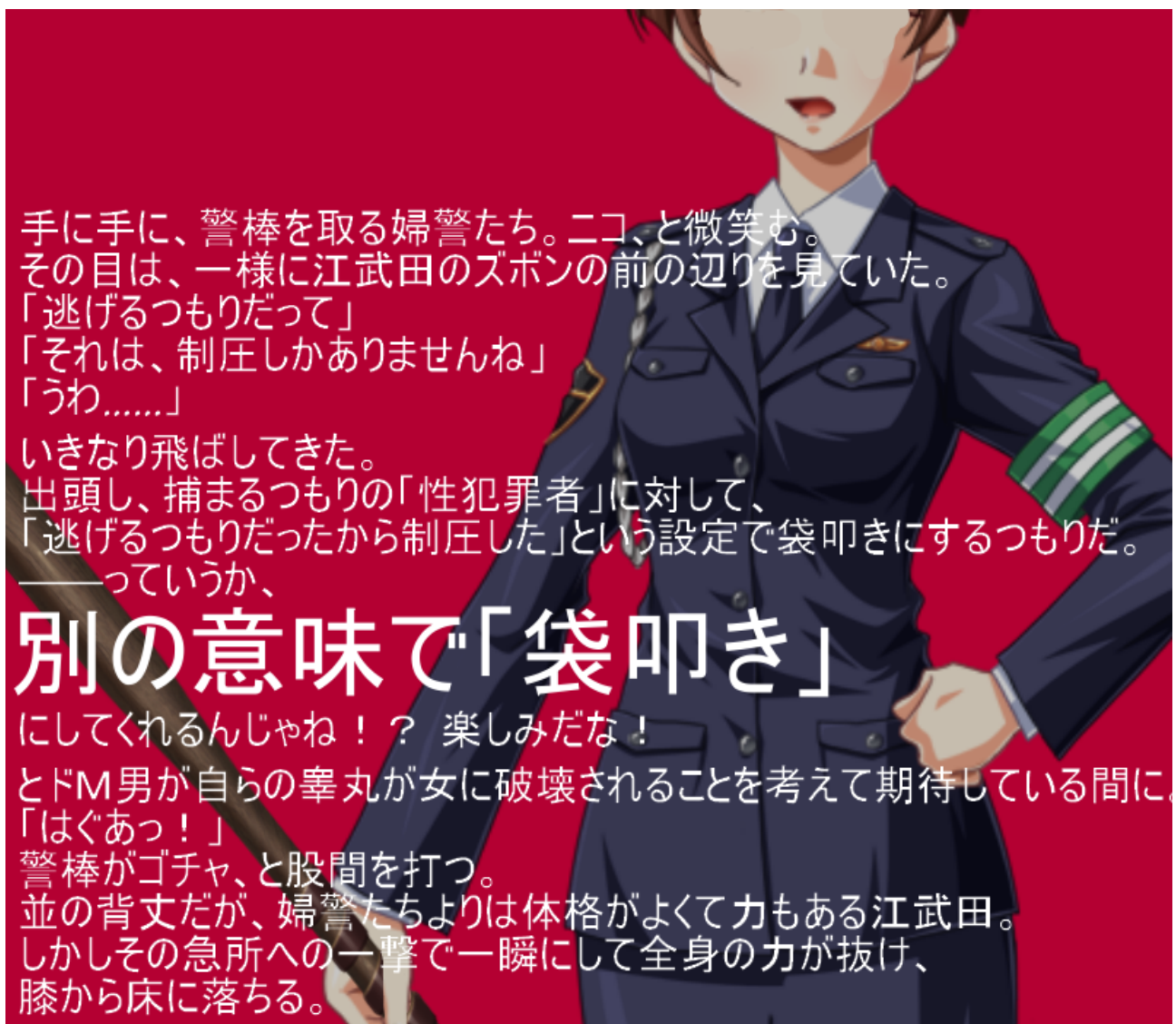
「はい！」

「え？ 何ですって？」

「え？」

「やっぱり気が変わったみたいよ」

手に手に、警棒を取る婦警たち。ニコ、と微笑む。



その目は、一様に江武田のズボンの前の辺りを見ていた。

「逃げるつもりだって」

「それは、制圧しかありませんね」

「うわ……」

いきなり飛ばしてきた。

出頭し、捕まるつもり「性犯罪者」に対して、「逃げるつもりだったから制圧した」という設定で袋叩きにするつもりだ。

——っというか、別の意味で「袋叩き」にしてくれるんじゃない？ 楽しみだな！

とドM男が自らの睾丸が女に破壊されることを考えて期待している間に。

「はぐあっ！」

警棒がゴチャ、と股間を打つ。

並の背丈だが、婦警たちよりは体格がよくて力もある江武田。

しかしその急所への一撃で一瞬にして全身の力が抜け、膝から床に落ちる。

「おんぐうううう」

と、口に何か押し込まれる。

「安心して、キ○タマ再生薬よ。それも最新式。潰れても瞬時に治り続けるから。それと、副作用で竿もタマタマも縮まなくなるから、握り潰しやすいわけ」

耳元で、ボソボソと語る婦警。

と、足を挙げる。

ゴチャ、座り込んでいた江武田の股間を踏みつける、玉を床に踏みつけるように。

「おぎゃあああああああああああああああ！」

「今の声は、片金死亡ってところね」

「佐々木先輩、滅多なことはいもんじゃありませんよ」

「あ、そうだったわね。タマタマは無事よ」

無事ではない、片金潰れていた。

しかし、足を挙げた一瞬で治ったのだ。

ズボンの下なので、婦警たちには見えない。

が、踏み潰した婦警、佐々木には分かっていた。靴の裏の感触で、踏み潰した玉が本当に潰れたか位は分かる。

分かるほど、そういうことを経験しているのだ。

模範的なうさぎ県警の婦警といえる。

江武田は、床に倒れこむ。

警棒の一撃と、片金が潰れた痛みはナノメカが傷を治してくれても消えないのだ。

それらの衝撃もだ。

一気に汗が噴き出す。

——こ、これよ……女にキ○タマ責められる……これこそ最高の悦楽。

それが、まだまだ楽しめる。

それも、無理矢理蹴ってもらうのではなく、蹴りに来るのだ。

逃げ場のない密室で、望んで蹴り潰しに来てくれる。

想像するだけで、味わうことが出来なかった夢のような時間が過ごせるはずだ。

泡を吹き、震えて床に突っ伏しながら、江武田はまだ自分の未来がある種の風俗店で好きな性的サービスが受けられるようなものだと思っていた。

彼は甘く見ていたのだ。

いつでもやめられるセックスや風俗と、これから受けさせられる去勢リンチの違いを舐めていた。

だが、最早引き返せない。彼は逮捕されたのだから。

体験版終わり

喜んでいる江武田ですが、徐々に金責めのダメージが蓄積し、ギブアップするために自白するというのも無視され、終わりが無いという事に気づいて絶望、しかしそれでもなお「終わりが無い」状況で、延々玉潰しを食らい続けます。

続きは製品版でお楽しみください